

め つけよ おお ひろ つけ めなり かんけんふた こと かん め
目の付やうは、大キに広く付る目也。観見二ツの事、観の目つよく、見
め わ とお ところ ちか み ところ とお み こと へいほう せん
の目よはく、遠き所を近く見、ちかき所を遠く見る事、兵法の専
なり てき たち いさかもてき たち み いうこと め たま
也。敵の太刀をしり、聊 敵の太刀を見ずと云事、目の玉うごかずし
りよう み ことかんようなり じようじゅうこのめつき なにごと めつき
て、両わきを見る事肝要也。常住此目付になりて、何事にも目付の
かわらざる所、よくよく吟味あるべきもの也。 なり

【大体の意味内容】。戦いの場での目のくばりは、視界を大きく広げようとする事。「みる」ということには『観』と『見』の二種類ある。『観』は物事の本質を深く見極めることで、これを強くし、『見』は表面のあれこれの動きを見ることだがこれは弱くせよ。遠く離れたところの様子を、間近のことに明瞭に『観』察せよ。逆に間近の動きはかえって遠くのもの『見』るように、その大体の様子だけ知ればよい。敵の太刀が、どのような筋道を描くかを知り、予測して、今現在の動きを見ようなどとはいささかも思つてはならない（予測できなければ先に切られてしまうからだ）。目の玉を動かさなままにして、両わきを見る事が大切である。（きよろきよろしなくても感覚を研ぎ澄ませれば、かなりの広範囲が見えるし、背後の物ごとについても気配で察知することができる）。常日頃から、こうした座禅のときの様なリラックした目付きで、いかなる場合でもそれが保たれるよう、よくよく吟味修練すべきである。

現代の格闘技や各種スポーツにも完全にあてはまる極意ですし、テストを受けるときの視界の据え方としても、大変有意義です。まずは全体を見渡して、どこから手を付けるべきか瞬時に判断し、設問のポイントを適格に見抜くこと。目先の条件だけに惑わされず、出題者の意図を、遠くを近いものと同じように明確に見通すこと。宇宙から地球を見下ろすように、様々な角度から考えてみることに。案外単純かもしれないと、心にゆとりを持たせること。パニックになって実力を発揮できずに終わることのないよう、視野を広げて冷静になりましょう。